

## 原田正純先生を偲んで

先生、長い間ご苦労様でした。

私が先生とお会いしたのは、私の現在の勤務場所「新潟県立環境と人間のふれあい館」での開館一周年記念講演会（平成14年8月4日）でした。演題は「子宮」は最初の環境というもので、一水俣からベトナム、私達のくらしから考える一でした。内容は別にしまして挨拶で先生らしいお姿を拝見しました。それは、

「私は一生懸命に水俣病に取り組んできましたが、しばしば行政とは衝突しまして、中々行政から声が掛かることはないものですから、本日の講演会のお話しが来たときに、本当に私でいいのかなと最初は思いました。」というものでした。

新潟は、最初、昭和45年から何遍も来ております。裁判所にも何回も来て証人にも出ましたし、馴染の方も沢山いらっしゃいます。しかし、考えてみると、新潟で水俣病の話をするのはそんなに多くはなかったですね。

という出だしから始まりました。自分と水俣病の出会い、水俣病という病名の忌避運動では、何という無神経な人達がいるもんだと。無神経というか、相手の立場になって考えようとしなことが、実は水俣病の一番大きな原因だと思いました。水俣病を研究している学者としか見ていなかった先生が、急に大きな姿として見えたのです。それ以来、いろいろな機会にお話をお聞きしたり、質問をしたりして今日まで参りました。

特に、昨年（平成23年8月1日）開催を予定しておりました、当館開館10周年記念講演会に先生と寿美子奥様、浦崎先生とお友達、そして私と5人で折角新潟へ久し振りに行くのだから、温泉でゆっくりしたいとのご希望で、瀬波温泉で宿をとり、旧交を温めました。（失礼ながら）

もともと、新潟から直接瀬波へ向かったのではなくて、昭和30年6月の旧中条町にあった砒素中毒の際、中条町を訪れたという先生のご希望から、中条町の当時とはその町並みは変遷してはおりますが、先生の記憶を辿って散策しました。

宿について、食事を楽しみながら久し振りの先生との話、子供の頃の柿、西瓜、鶏のガキ大将としての先生のリーダーシップ悪戯に始まり、受験、医者とその時代時代の事柄や水俣病から離れられなくなった胎児性水俣病患者との出会いと、時間を忘れ、一生懸命に話される先生のお姿、話を夢中になってお聞きし、楽しい一時を過ごすことが出来ました。そして、8月1日記念講演会の当日、早めに昼食を摂っていたところ、新潟・福島集中豪雨により本日の講演会は中止としたいという電話連絡でした。村上では、新潟がそんなことになっているとは全く想像も出来ない素晴らしい日でしたから。

可笑しいですね、変ですねと新潟を一路目指しました。途中、テレビニュースでこれは大変なことになったと、車内一同状況を確認することが出来ました。

先生には、今回は残念です。機会がありましたら、ぜひ、お時間を取っていただきたいとはお話ししておりました。

あわただしい、講演会の中止連絡などが終わって暫くすると、やはり参加希望をされた何人かの方から、中止のままでいいのですか、いつ頃再演するのですか、ぜひ先生のお話

をお聞きしたいというご希望が寄せられ、また私どもも中止のままで開館10周年が終わってもいいのかという気持ちも芽生え始めたのは事実でした。そうこうして10月16日再度の10周年記念講演会を開催し、先生のご講演「新潟水俣病に学ぶ」をお聞きすることができました。

先生は、翌日東京で別なことで、人とお会いする予定があるとのことで、暫くしてお礼の連絡をしましたら、新潟から戻ってから輸血を毎週受けている由。

一日も早いご回復をお祈りしておりました。が、この度、帰らぬ人となられ誠に残念ではありません。あちらの世界では、川本輝夫さん、杉本栄子さん、上村智子さんら多くの方々とお会いになられていることでしょう。本当に長い間、ご苦労様でした。ありがとうございました。

さようなら、さようなら

平成24年6月14日、送る会 日

新潟県立環境と人間のふれあい館 館長 塚田 眞弘  
(新潟水俣病資料館)